

英文法導入のための 「フォーカス・オン・フォーム」 アプローチ

高島英幸 編著

A5判 240pp.
本体2200円＋税

田中和彦



新教育課程に即応した「サンドイッチ」型英語教授法

平成25年度より施行される新高等学校学習指導要領では、科目の再編が行われ、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」及び「書くこと」の「4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力」の育成が求められている。同時に、「文法指導を言語活動と一体的に行うよう改善を図る」ことが示されている。この指針に沿い、「聞いたことを踏まえ内容的にまとまりのある発信ができる」などの英語力を培う指導を行うには、一層の配慮や工夫が不可欠となる。教室外で英語を使用することがほとんど無い学習環境を考慮に入れた、理論に基づく系統的・段階的指導法が必要であり、教育現場ではそれを模索している。

その方策の一つが本書のアプローチである。著者は、コミュニケーションをする中で文法に学習者の意識を向けさせる言語活動を「フォーカス・オン・フォーム活動 (Focus on Form Activity, 以下, FonF 活動)」と位置づけ、この活動の前に文法説明を行い、活動後には定着のため、さらに文法に関わる説明や練習を行う指導を提案している (p. 22)。これは、Long (1991) の「フォーカス・オン・フォーム (Focus on Form)」, すなわち「コミュニケーションに必要な場面面で文法等の形式を認識し、言語の形式・意味・機能の結びつきを理解することが言語習得を促す」(p. 53) との考えを参考にしている。

アプローチの中核をなす FonF 活動は、「原則として2つ以上の技能を有機的に関連させた統合的な活動」となっており、具体例として、特定の文法項目の使用をねらったタスク (Focused Task) などが示されている。FonF 活動をより効果的にする文法説明に

関しては、「内容」「方法」「タイミング」の3つの観点からの示唆に富む解説がなされている。加えて、文法説明からプラクティス、FonF 活動への流れが例示され、いずれの段階でも、教師と学習者、学習者間の英語によるインターアクションの重要性が強調されている。

本書が教室での実践に活用できると思われる点は、特に次の2点である。

1 点目は、発話の機会など教室環境における制約を十分に考慮した内容となっていることである。基礎・基本となる文法説明と言語活動を中心として、総合的に4技能を扱うための具体例が多く提案され、それらが自然な形で発展的な学習や活動へと進行するよう工夫されている。文構造などの形式の学習から意味伝達の内容に重きを置いた活動への移行が念頭に置かれ、プラクティスからタスク型の活動まで一連の言語活動が適切な範囲・段階まで試せるようになっている。

2 点目は、指導例を提示する文法構造を、このアプローチによる効果が期待できるものに絞っている点である。これらは、中学生を対象に著者らが行った文構造の習得状況調査の結果分析や、母語の影響についての考察から、SVOO や後置修飾など日本人英語学習者にとって習得が困難とされるものである。活動の実施時期の多くは中学校で例示されているが、対象項目は高校で再度学習するものでもあるため、難易度などの変化をもたせつつ、繰り返し指導に取り入れることが有効である。このような指導は、新学習指導要領の「生徒の実態に応じて、多様な場面における言語活動を経験させながら、中学校や高等学校における学習内容を繰り返して指導し定着を図るよう配慮するものとする」という指針とも合致する。

本書の大部分を占める上記文法項目の指導例には、詳細で分かりやすい説明がつけられている。また、種類も豊富で、そのまま教室で試してみるだけでも何らかの示唆が得られるはずである。さらには、その実践をもとに修正を加えたり、別の文法項目に関して活動を考案するなどの発展的活用も充分可能である。

本書は、新学習指導要領の施行にあたり、強力なパートナーとなりうる1冊である。

(たなか かずひこ・兵庫県立三木北高校教諭)